

新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育
サポートセンターだより

も え ぎ

第 113 号

令和4年1月18日
新潟市教育相談センター
新潟市特別支援教育サポートセンター
新潟市中央区西大畑町458番地1



新年を迎えて

新潟市教育相談センター
所長補佐 八百板 恵理子

新しい年が始まりました。今年の干支の寅は「壬寅」と言うそうで、厳しい冬を乗り越えるほど生命力あふれる春が訪れる、という意味があるそうです。二年越しとなってしまったコロナ感染症の心配はなかなか拭えませんが、今年の寅にあやかって、希望を胸に過ごしていきたいものです。

さて、昨年ある研修に参加した際に「リエゾン」という漫画の紹介がありました。児童精神科・佐山クリニックを舞台に様々な心の病を抱える子どもたちに向き合い、周囲の協力を得ながら解決に真摯に取り組む登場人物の姿に共感し心打たれました。背景にある問題は、ヤングケアラー、虐待、不登校、発達障がい等、まさに、教育や福祉の現場も直面しているもので、相談者の思いや願い、支援の経過が丁寧に描かれています。読後に、支援の基本は、子どもたちや保護者に寄り添い、心の声を聴き、共に解決に向けて対話を重ねていくことであることに改めて気付かされます。

しかし、不登校においては、そういった支援を提供したくとも、支援の入り口にすら立てていない状況もあるようです。文部科学省が不登校への支援の

在り方を検討・充実するために、不登校児童生徒本人や保護者の協力を得て、令和2年12月に調査を行いました。調査結果の概要によると、「支援の必要を感じていない」ことや、「相談先はわからない」ことから支援に繋がっていない子どもや保護者がいること、「学校にいきたくない」ことを早期に家族以外に相談できている割合が低いこと、そして、「誰にも相談しなかった」が4割であったとのことでした。令和2年度の不登校人数は全国で19万人であり、過去最高となりました。当センターの相談件数は年度末を待たずに前年度の相談総数を超えそうな状況であり、その9割が不登校に関する相談です。従来からある相談機関に加えて、SNS相談やフリースクール等など、支援の在り方は多様になってきています。初期段階で抱え込んでしまわないように、本人からの相談を待つだけでなく、こちらから働きかけていく支援や、多様な支援につないでいくことが必要となってきているように思います。

冒頭でご紹介した漫画の題名「リエゾン」とは、フランス語で「連携」や「連絡」を意味するそうです。学校やご家庭はもちろん、福祉や医療の専門機関、フリースクール等など多くの方々と共に、当センター・各区教育相談室に支援を求めてくる子どもたちに寄り添い、成長を見守り、将来の社会的自立を目指した支援に努めていきたいと思えます。

どうぞ今年もよろしく願いいたします。

令和3年度 作品展のお知らせ

日 時：令和4年1月28日(金)
会 場：新潟市教育相談センター
作品展示：10:00～14:10
音楽発表Ⅰ：10:30～10:45
物品販売Ⅰ：10:50～11:40
音楽発表Ⅱ：13:00～13:15
物品販売Ⅱ：13:20～14:10



折り紙



インテリア小物

3密を避けるため、午前と午後の開催となります。
事前の申込みをお願いします。

令和3年度 教育相談研究会

〈研究主題〉「今、求められている子どもへの支援」

日時 令和3年11月24日(水) 15:00～16:30

〈各室・訪問教育相談のプレゼン〉

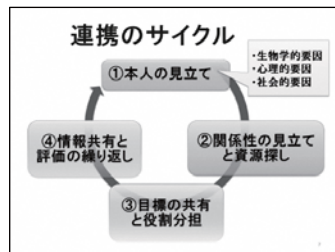
例年ポスターで紹介していましたが、今年度から映像で紹介することにしました。感想をご紹介します。

- ・各室、訪問の方々の工夫や思いが、それぞれの形で表されていて、見やすかった。
- ・時間も長すぎず、映像・音楽があつて良かった。



〈第1分科会・教育相談〉不登校に向き合う関係者の連携

指導者 新潟青陵大学大学院 教授 佐藤 亨 様

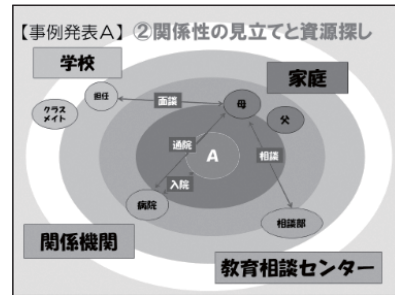


第1分科会では、テーマにかかわり、新潟青陵大学の佐藤亨先生から、「不登校の心理」についてご講演いただきました。「不登校の対応が現象に対しての対応になってはいないだろうか?」という問い掛けから、不登校の子どもを支援を考える際の見立て、対応についてお話しいただきました。不登校の背景にはどんな問題があるのか詳しく解説していただき、どのタイプなのか、何が不登校を維持しているのか、現在の段階にあるのかをしっかりと見立てること、その上で対応を考える必要があることを教えていただきました。また、具体的に家庭訪問の際の留意点なども示していただきました。

教育相談部では、今年度、「不登校に向き合う関係者の連携」をテーマとして、取組を発表しました。「不登校に向き合う」とは「関係者がかかわり続け、見守り続ける」と捉え、連携して効果的な支援を行うための連携のサイクルを提案しました。具体的な2事例の不登校支援をもとに、連携のサイクルを回すポイントについて説明しました。

発表後には、参会の皆様から現在かかわっている不登校の児童生徒・保護者に対するご質問を多数いただき、佐藤亨先生にも適宜お答えいただきました。「現在その子とかかわる人たちが間接的であれ接触を保ち続けていくことが重要である」、「担任している間になんとかしたいと思うことは当然の気持ち。しかし、動き出すタイミングが今ではない場合もある。その子が人とつながるための種まきをすることが大切なこと」と教えていただき、大変有意義な時間となりました。

今後も、教育相談部では、相談者に寄り添った効果的な支援ができるよう、学校をはじめとした関係機関と有機的な連携を図っていきたいと思っています。



〈第2分科会・適応指導教室〉児童生徒理解・教育支援シートを活用した学校連携

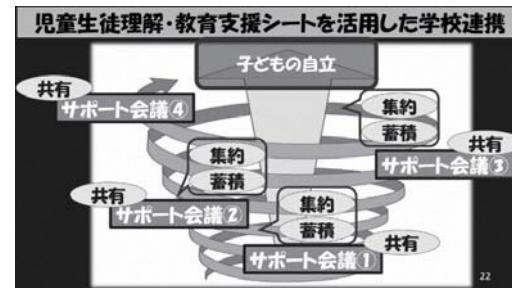
指導者 新潟大学大学院 准教授 田中 恒彦 様

第2分科会の実践発表に先立ち、新潟大学の田中恒彦先生から『効果的なコラボレーションのために』という演題でご講演いただきました。「多職種連携」をキーワードに、効果的な連携の在り方等についてご指導いただきました。各連携機関が自分たちの役割を自覚し、相互にリスペクトし合いながら(重なる部分を持ちながら)、連携したリーダーシップを発揮することの大切さを強く感じる内容でした。

その後、適応指導部の実践発表を行いました。テーマは「児童生徒理解・教育支援シートを活用した学校連携」です。今年度の発表では、特に、本人(児童生徒)に関わる全ての支援者が、それぞれ得た情報を支援シートの追記やサポート会議を通して共有すること、そして、サポート会議に保護者を加えて、支援シートを基に方向性と取組を共有し、役割分担を明確にしながら支援を進めたことが取組の大きな特徴でした。こうした取組により、方向性をそろえた支援を行うことができ、本人にかかわる全ての支援者の協働意識が高まりました。また、保護者の学校に対する不信感が解消したことも成果の一つとなりました。

支援シートは、書くことが目的ではありません。そして、連携とは、単にサポート会議等の会議を開けばよいというものでもありません。目標や目的に向けた有意義な話し合いができてこそその連携です。そのために、支援シートを有効に活用していくことが大切だと考えています。

今後も、本人に対するよりよい支援ができるよう、学校をはじめとした関係機関と連携を深めていければと思っています。



〈第3分科会・特別支援教育〉子どもの気持ちに寄り添った確かな連携

指導者 新潟大学大学院 教授 長澤 正樹 様

「子どもの気持ちに寄り添った確かな連携」をテーマに掲げ、発達に障がいのある児童へ、関係者が連携して支援にあたった取組を発表いたしました。

個々の支援者は不安や悩みを抱えながらも、その子の「困っていること、したいこと」に焦点を当て取り組み続けました。まず、支援者間で気になる本人の実際の行動を明らかにしました。そして、その行動が表出する背景について仮説を立てました。その仮説に基づき本人の思いを推察しました。ここまでを情報共有と位置付けました。次に共有した情報を基に具体的な支援策を計画し、それぞれの立場で実行しました。これを行動連携と位置付けました。この二つの取組を繰り返す中で、支援の質が本人の思いに寄り添ったものへと変容するとともに、支援者それぞれにとって納得のいく支援が行われるようになっていきました。子どもの「楽しくなりたい」に応じて「温泉に行こう(単元名)」の授業が構築され、そのことによって、本人の行動が落ち着いた様子になりました。学校と保護者の関係もさらに良好なものになりました。

講師の長澤正樹先生からは、発達段階に応じた障がい特性とその対応についてご講演いただきました。加えて、連携することの意義やその在り方について、互いを尊重し合うこと、事実を積み上げること、解決のゴールを共有することなど、大切にすべき事柄を分かりやすくお伝えいただきました。



参加者の方々の声

【第1分科会】

- ・連携のサイクルがとても参考になりました。②の関係性を見立てと資源探しの関係図はすぐにでも使いたいと思いました。一人で抱えず複数で相談し合い、大きな変化を期待するのではなく、無理なく少しずつ信頼関係を築けていけたらよいと思います。
- ・①本人の見立てはできていたと思っていましたが、②資源探しが不十分で支援につなげられていなかったように思いました。もう一度やり直してみます。
- ・学校の子どもたちを思い出しながら聞かせてもらいました。佐藤亨先生のお話を聞いて、本当にケースバイケースで、不登校になった背景を見極め、その子に合った対応を情報共有しながら進めていくことの重要性を感じました。
- ・日頃、発達障がいにかかわる相談が多く、その中には不登校の児童も少なからずいます。これまで漠然とした視点で彼らを見取っていましたが、今日は「見立て」についてお話をいただき、大変参考になりました。実践につなげて参ります。



【第2分科会】

- ・田中先生のお話はいつも勉強になる。「隠しごとのない支援」とても分かりやすく、説得力のあるキーワードとなりました。
- ・Aさんのリアルな事例が大変参考になりました。教育支援シートを活用しての支援、特にサポート会議が今私の欲しい内容でした。保護者の方をサポート会議に入れる発想がなかったのですが、「隠しごとのない」支援を、保護者、学校、専門家、ともに行えるのと思いました。やってみたいです。
- ・第2回サポート会議までの学校不信でいっぱいの保護者が、第5回で保護者自身が自らを見直すことに気付いたことが素晴らしいと思いました。連携した全ての支援者の方の在り方の成果だと思いました。支援シートを真ん中において、それぞれがそれぞれの立場で子どものために話をしていける形をまねていきたいと思いました。
- ・まさに学校でかかえる問題と同様の事例でした。連携することで、良い結果に導いていく見通しをもつことができました。
- ・Oや*など、支援シートの記載の工夫がとてもよいと思いました。



【第3分科会】

- ・久しぶりの長澤先生のお話はとても良かったですし、相談業務の根幹にかかわるものでした。徹底して子どもに寄り添う支援が有効だと分かりました。
- ・サポートセンターが支援会議を支えてくれることで担任や保護者の安心につながっていると思いました。子どものニーズがとても大切だということ、支援計画の振り返り、そして更なる支援につなげていることが大変参考になりました。
- ・連携する際、家庭と学校の「困りごと」で共通することを確認し、子どもの「こうしたい」をよくきくことを重点としたい。計画的にすすめたい。
- ・今回はサポセン・学校・保護者の支援会議でした。学校で行う際にも保護者の困りごと、不安、悩みの受け止めをしっかり行い、事実を共有して、子どもの支援を行っていききたい。
- ・通常学級に在籍する配慮の必要な児童が増えてきている。その結果不適応を起こして不登校になるケースがある。その点についてもご指導いただけるとありがたい。



適応指導部の活動紹介

一步前に踏み出すための 「心のエネルギー」を…

適応指導部主任 松島 慎一郎

適応指導部では、不登校状態にある子どもの学校復帰や社会的自立に向けた学習支援・体験活動、教育相談を行っています。主に東区、中央区、西区の子どもたちを受け入れている教育相談センター内の適応指導教室「ぐみの木教室」、北区の「さわやかルーム」、江南区の「そよ風ルーム」、秋葉区の「レインボールーム」、南区の「おおぞら教室」、そして、西蒲区の「スペースレスト」と、それぞれ5つの区にも適応指導教室が開設されています。また、昨年度9月から、ぐみの木教室東区分室も開設されています。

センター内にある「ぐみの木教室」では、学習支援を目的とした「チャレンジタイム」を午前中に行い、午後は他者とかかわる力を育てる「コミュニケーションタイム」を行っています。今年度も、様々な活動を通して、「自己決定すること」や「人、もの、ことにかかわる活動」を多く計画・実施してきました。昨年度からのコロナ禍ということもあり、今年度も、アクリル板の仕切りを使用したり、こまめに手指消毒をしたりして、感染症対策

に配慮しながら活動しています。昨年度はできなかった調理や茶道も、今年度は実施することができました。下は、子どもたちの感想の一部です。

【茶道】

- ・ちゃんとした作法でお茶やお菓子を運んだり、食べたり飲んだりするのはとても楽しかった。(燕喜館が)和室だったので、よりお茶の世界を楽しめたと思う。
- ・初めて人にお茶やお菓子を出してとても緊張したけれど、楽しかった。

【調理】

- ・野菜を切るのもフライパンを持つのも力があるし、集中するのですごく疲れたけれど、完成させることができてすごくうれしかった。
- ・私は野菜が苦手だけれど、わりと食べることができた。みんなと協力したからだと思う。チャーハンと野菜スープの味がとてもおいしかった。

私たちは、こうした活動を通して、子どもや保護者、学校関係者の方々の思いや悩み、ニーズに耳を傾け、連携を大切にしながら子どもの成長につながるよう支援・相談活動を行っています。子どもたちの学校復帰や社会的な自立に向けて、前に踏み出す「心のエネルギー」をためたり、子どもたち自身の「居場所」になったりするように、今後も適応指導部が一体となって支援・相談活動に努めていきます。

夜間「学習・進路相談室」から

夜間「学習・進路相談室」主任 坂井 毅

夜間「学習・進路相談室」は、新潟市の中学校に在籍し、外出しにくい不登校傾向にある生徒に対して、夜間に学校と異なった環境の中で、教育相談や学習指導及び進路指導等を実施することにより、生徒の自立と学力の向上を促し、学校生活への復帰や進路目的の達成を支援しています。

平常時は、水曜日以外の4日間、午後5時10分から8時までの時間帯に開室しています。

来室する生徒の多くは、様々な悩みを抱え、自信を失い、不安な気持ちで来室してきます。

そこで、今年度は、生徒が気軽な気持ちで来室できるように、「やさしさ」と「笑顔」を心掛けて接しています。具体的には、来室時の受付で、来室できたことをやさしい言葉で賞讃し、また、学習を終えて退室する際には、送迎して下さる保護者へ感謝の気持ちを伝え、玄関先では、笑顔で手を振り、生徒を見送っています。今では、多くの生徒が元気良く手を振って返してくれるようになりました。

学習に関しては、懇切丁寧な個別指導を行っています。初めは学習に積極的に取り組めなかった生徒も、定期的に通室して学習することで、新たな発見や学びを見出し、成長への原動力になっています。

来室した生徒の皆さんにとって、愛と喜びのある貴重な時間になるように、微力ではありますが、可能な限りの支援を続けていきたいと思ひます。

心が解放される場所

絵を描く部屋 講師

小川 かほる

子どもたちには、心に浮かんだイメージをもとにのびのびと絵を描いてほしいです。でも、これが難しい。私自身を振り返っても、思春期の頃は、この色、変かな？この絵、変だと思われないかな？などと思いながら絵を描いていたこともありました。周りの目が気になって自由に描くことを楽しめませんでした。どうして今は周りを気にせず描けるのだろう。絵の部屋を担当して間もなく3年ですが、そんな何気ないことに気付くことができました。

誰でも、こんな風に描きたい、という漠然としたイメージをもっています。うまく言葉に表現されないことも多いのですが、この子の表現したいイメージはこうかな？と想像力を働かせて、実現できそうな画材や技法などを提示してみます。パズルのピースを組み合わせるようなとてもわくわくする作業です。これじゃない…と思われることも少なくないですが、その子の感性にうまくはまったときは踊りだしたいくらい嬉しいです。

自分で描いた絵のイメージが、「他の人に伝わるのって楽しい！」という小さな成功体験が積み重なって、作者である子どもも、描かれる作品も、のびのびとした雰囲気になります。そんな作品や子どもの姿を目にすると自身のかつての姿が重なり嬉しくなります。安心して自分を表現できる場所づくりを続けていきたいと思ひます。

